

# ロールシャッハ法における対話

## —心理面接との照合—

角藤 比呂志

### 1、はじめに

人は、それぞれが自分の物語を生きようとしている。個々の物語は、独創的で個別性を持つが、そこに普遍性を見出し、神話やおとぎ話との関連性を指摘したのは、主にユング派の人々である。ユング派のひとり織田（1999）は、神話を狭義の神話と広義の神話に分け、後者を「個人の生来的なものの影響や親子関係や成長過程でのさまざまな体験によって形作られ、個別の価値観やこだわりを持ち、生を支えるものあるいは基礎づけるもの」と定義し、「個人神話」と呼んだ。

本号の特集テーマである「神話を生きる」を広義の神話と捉え、我々がどのように個人神話を生きているのかに思いを馳せる時、対話の重要性が見えてくる。

われわれは、対象が自己であれ他者であれ、あるいは超越的なものであれ、森羅万象との「対話」の中で生きている。この対話を特殊化したものが、援助技法としての心理面接（心理療法）であると言えよう。

筆者は、ロールシャッハ法をライフワークとし、ロールシャッハ法は心理面接のひとつであることを主張してきた。

そこで、本論では、ロールシャッハ法にみる対話の様相を通して、心理面接に必要な対話の留意点を探ってみたい。

### 2、ロールシャッハ法と心理面接の共通点

ロールシャッハ法は、周知の通り、ヘルマン・ロールシャッハが考案した投影法の一つである。10枚のインクのシミでできた図版を提示し、「何に見えるか」を問う（自由反応段階）心理テストであるが、その反応について、検者と被験者が互いに吟味する段階（質疑段階）があ

り、その点で他の心理テストとは大きく質を異にしている。つまり、検者と被験者が、反応（図版）を媒介にして、相互的な関係性を持つ。

ここでの検者—被験者の実際的な位置関係は、対面であったり、並列であったり、背後であったり、その研究者（流派）によって異なるが、心理的な位置は、反応（図版）を媒介にして三角形の構造を持つと筆者は考えている。

また、同じ刺激（図版）を共有しているために、検者と被験者の個々が刺激に対する反応（イメージ）を生じており、その差異を埋めるべく、反応（イメージ）についての摺り合わせが行われる。この際、検者は被験者のイメージに添うように追体験するが、この摺り合わせが困難な場合がある。原因は、二つ考えられる。ひとつは、被験者側の要因で、被験者が刺激（図版）からかけ離れて独自のイメージを展開しているか、刺激に対する知覚そのものに歪曲が生じている場合である。もう一つは、検者側の要因で、自らの独特な知覚様式あるいはイメージに執着している場合である。前者の要因には、被験者の病理性が含まれることがあり、後者の要因には、検者のコンプレックス（逆転移）が含まれることが多い。

さらにロールシャッハ法は、対称性という共通した性質を持ちながらも大きさ・形態・色彩・濃淡など異なる特徴を持った10枚の図版から成り立っており、それぞれが被験者にとってはストレス因子となるような構造となっている。それ故に、被験者に対する検者の対応は、支持的であることが望まれるが、こうした構造の中で被験者の心理機能は、退行と回復を繰り返し、個人神話を露わにする。つまり、10枚の図版に表現されるものは、被験者の生きてきた物語とフラクタルな関係にあると考えることが出来る

が、特にイニシャルカードである図版Ⅰにおいて、顕著であるように筆者は思う。これは、心理面接あるいは夢分析において第1回目ものにその後のすべてが凝縮されていることが多いことと酷似する。

このように、検者—被験者関係における相互的な関係性・三角形の構造・転移—逆転移、そして個人神話とのフラクタルな関係性など、ロールシャッハ法は、心理面接と共通する側面を持っている。

### 3、ロールシャッハ法と心理面接の相違点

神田橋(1997)は、「コトバはイメージを運ぶ荷車だと気づいて面接の核心をつかんだと感じた」と述べている。

たとえば、「赤色」と聞いて同じものをイメージする人が何人いるだろうか。二人の人が会話をしている、一方が「海って好きなんだ」といい、もう一方の人も、「そう、私も」と言ったとしても、その時点で同じ海について会話をしているとは限らない。

同様に、治療過程の中でクライアントが「母が嫌いなんです」と述べ、治療者が「あっそう」と答えたとしても、クライアントの「母」を理解したとは限らない。もし治療者が、復唱できるほどにクライアントの話を聞いたとしても、クライアントの「母」を理解したとは言えないだろう。コトバは単なる媒体であり、表現の手段である。そのコトバに乗せられたイメージを受け取らない限り、「対話(面接)」が成立したことにはならない。ましてや、イメージを捉えられずして、その根底に潜む体験まで受容することはできない。

心理面接における行動化や中断、失敗例の多くはこのイメージのずれ(対話のずれ)に基因すると筆者は考えている。誤解されるかもしれないが、筆者は全く同一のイメージを持たなければならないと言っているわけではない。極論すれば、全く同一のイメージを持つことは所詮出来ない。つまり、共感とは、互いのイメージ

が重なりあいながら、ずれを極力最少限にすることではないかと考えている。互いのイメージはその個人の体験から生まれるものであり、個々人の物語の数だけイメージも存在する。だから、イメージの重なりを要求される心理面接には長きに渡る修練が必要とされる。

一方、ロールシャッハ法で生じるイメージ(反応)は、インクプロットに「ある程度」規定されているといった相違点がある。この「ある程度」という言葉は、規定の度合いが完全でもなく、ゼロでもないことを意味しており、そこにロールシャッハ法の特長がある。イメージ(反応)が、インクプロットによってある程度規定されることによって、ことばを媒介としてイメージ(反応)を交換してもそのずれは心理面接ほど大きなものとはならない「はず」である。

ところが実際は、さまざまな事情により、ロールシャッハ法でも数々の対話のずれが生じる。以下では、検者の陥穽といえる具体例を挙げ、対話のずれを検証してみよう。そうすることで、心理面接における対話のずれへの何らかの警鐘となると考えられるからである。なぜなら、ロールシャッハ法が、インクプロットという規定枠(現実性)を持つことにより、イメージに伴う実体性が明瞭となり、対話のずれが明確になりやすいからである。これは、心理面接との相違点でもあり、ロールシャッハ法の利点でもある。

### 4、ロールシャッハ法における対話のずれ

以下では、主に図版Ⅰを例にとり、そこでの対話のずれについて述べよう。なお、被験者の言葉は「」、検者の言葉は( )、検者の考えは[ ]で記載する。

例1、「コウモリには見えないですね。」

(では、何にも見えないということですね。)[Rejectionした]

#### 【解説】

被験者が、「～に見えない」と否定的表現(negative sentence)をしたことに

よって、検者は被験者が「何にも見えていない」と判断した。実際、被験者は、「コウモリ」というイメージとインクプロットとの不一致部分が受容出来なかったことを伝えていたのであるが、検者は「見えない」という否定的なコトバに反応してしまった。

- 例2、「コウモリに見えます、ここが羽で胴体で、ここのところはよくわかりませんが。」  
(羽で、胴体で、ここは入らないんですね。)[反応領域は全体ではない]

**【解説】**

被験者は、図版の全体に「コウモリ」を見ていた。ただ、コウモリを説明する段になって、羽と胴体以外の部位の名称が思い浮かばなかったのである。検者は、「よくわかりません」という被験者のコトバに反応し、被験者が全体ではなく一部を切除した領域に「コウモリ」を見たこと判断してしまった。

- 例3、「ガですね、汚いやなガ、形からそう見えました。」  
(形からガに見えたんですね。)[決定因は形態反応]

**【解説】**

被験者は、黒色に対して情緒的に反応し、「汚い」「いやな」ガを見たが、検者は「形からそう見えました」という被験者の言葉に反応して、情緒的な応答の根拠を尋ねることを失念してしまった。

- 例4、「血に見えます。」(図版Ⅱ)  
(どういふところから?)

「この飛び散ったところ。」

(ああ、飛び散っているから血に見えた。)

[決定因に色彩は入らない]

**【解説】**

反応の決定に色彩は関与していないと考えることもできよう。しかし、筆者は被験者が赤色刺激に反応して「血」を見

たと解釈する。なぜなら、特殊な場合を除いて、「血」をイメージするためには色彩は不可欠だからである。「暗黙の了解」の中で対話が行われていると考える。「コトバ」にとらわれるか「イメージ」を追体験するかによって反応の解釈は違って来るように思われる。

- 例5、「真ん中のこの濃くなっているところが人に見えた。」  
(ああ、濃くなっているので人に見えた。)  
[決定因は濃淡反応]

**【解説】**

検者は被験者が濃淡刺激に反応して「人」を見たこと判断した。しかし、「濃くなっているところ」というコトバは、単に反応領域を指しているに過ぎない場合がある。なぜなら、そこは濃淡刺激に敏感でない人でも明瞭に知覚できる濃淡があるからである。

- 例6、「ふわふわした毛皮に見えます。」(図版Ⅵ)  
(ああ、ふわふわした感じがあるんですね。)[決定因は濃淡反応]

**【解説】**

検者は「ふわふわ」という触感覚を示すコトバに反応して、即、濃淡刺激に被験者が反応したと判断した。これは、検者の投影であり、被験者によっては、外郭の小さな曲線に反応して(形態反応)「ふわふわ」を見る場合がある。

- 例7、「二人の人が向かい合ってます。」(図版Ⅲ)  
(向かい合って何かしているんですね。)  
[決定因は人間運動反応]

**【解説】**

日本語の「向かい合う」という表現は二つの場合が考えられる。ひとつは「ただ対面して存在している」場合、もうひとつは「双方間に交流がある」場合である。おそらく英語では、前者はBe動詞、後者は一般動詞で表現されることになる。

だろうが、日本語ではその差異を認識することが難しい。ロールシャッハ法では、前者は形態反応、後者は運動反応ということになる。

例8、「犬に見えます、私の家の犬、よく吠えていたんですけど、この間死んでしまいました。その犬の顔にそっくり、全体で。」(ああ、全体で犬の顔に見えたんですね。その犬はいつ死んだんですか?)

[決定因は形態反応]

#### 【解説】

被験者は、図版全体に、「吠えている犬の顔」を見ているが、個人的な「私の犬」の話をし、インクプロットからやや離れた連想を展開していた。検者は、「私の犬」が「死んだ」ことに反応し、何故に被験者が「よく吠えていた」と語ったかをインクプロット刺激との関連から考えることができなかった。

さて、ここまで八つの例を揚げたが、例1は表現型、例2は反応領域、例3～8は決定因に関する対話のずれであった。

ロールシャッハ法が、検者—被験者の相互的な関係性の中で成り立つ以上、検者の対応が被験者の反応に影響を及ぼすことがある。たとえば検者が「もっとありますか」と質問することで被験者が多くの反応をしななければならないと思ったり、検者が「それは形から見たんですか」と質問することで、その後、被験者が「形から～」と繰り返したりする。

また、検者自身の不安から、不快な反応を検者が聞き落とししたり、聞き間違えたり、忘却したりすることもある。

### 5、対話のずれへの対処法

対話は、極論すれば、二者間の刺激—反応といった相互関係性によって成立する。「売り言葉に買い言葉」は日常生活における典型例である。臨床では、互いのコトバ(刺激)に適切に反応

したかどうかによって対話のずれの程度が決まってくる。前節のすべての例は、被験者のコトバに検者が不適切に反応した結果生じたものであった。

また、コトバに乗せて運ばれた被験者のイメージを検者が追体験できるかどうかでも対話のずれは生じる。この追体験の困難さの要因については、「2、ロールシャッハ法と心理面接の共通点」の項で述べた。

ロールシャッハ法は、反応領域・決定因・反応内容といういわゆる記号化のカテゴリーがあり、被験者のイメージを追体験し、この三つの箱に「分ける」ことにより、被験者の物語を分かろうとする。だから、追体験出来ないイメージは、「分けられない」し、わからない。結果として記号化も困難となる。換言すれば、解釈が成立して正確な記号化が生じるのであって、その逆ではない。(一般に、記号化の「結果」から「解釈」が成立すると考えられがちだが、記号化に至る「プロセス」が重要であることを筆者は主張したいのである。)

では、これらの対話のずれをどう修正したらいいのだろうか?

筆者は、被験者がコトバに乗せて運んだイメージを、インクプロットと照合しながら「なぞる」ことを心がけている。これは、単なるおうむ返しということではない。検者が捉えたイメージを、図版を媒介として、フィードバックするのである。

この基底には、図版を頂点とし、検者と被験者が底辺を結ぶ三角形の構造が必要であり、検者も一緒に図版を見ているといった雰囲気が必要である。

そうすることによって、被験者は、自らのイメージを受容されたと感じ、検者は、被験者の物語を理解する上で必要な情報を得ることになる。また、イメージとプロットを常に照合することにより、あいまいなイメージも実体性を伴うものとなり、錯誤が生じにくくなる。これは、特に例8のように、被験者が図版から離れて自

己の体験や空想（作話）を語る場合に重要である。

技法的なことになるが、「～ですか」とは問わずに、検者が理解したイメージを、「～ということですね」と返すようにする。探求的な雰囲気を作らないためのひとつの工夫である。そして最終的に追体験できない部分について尋ねる。

こうしてコトバを媒介としてイメージの交換をしていると、検者が経験を積むにつれて、検者からのコトバが少なくなってくる。検者が被験者のコトバに耳を傾け、運ばれたイメージをインクプロットと照合しながら追体験していると、被験者のイメージの展開（流れ）が見えてくる。ロールシャッハ法ではイメージが図版によって規定されるために、検者は、被験者のイメージを追体験しやすくなるのである。この点、心理面接では、面接者のイメージが個々の体験や学習された理論等に起因するために自由度も大きく、被面接者のイメージとの錯誤も生じやすい。故に自己分析の必要性も大きくなるのではないだろうか。

いずれにしても、検者（面接者）の経験が増すごとに、もはやコトバはいらなくなってくる。

心理面接においても、究極の到達点はここにあるのだろう。しかし、心理面接においては相手のイメージに同一化しようとするあまり、両者が融合してしまうといった陥穽が生じる。心理面接の原則のひとつに、「体験自我と観察自我」「関与しながらの観察」といった言葉があるが、ロールシャッハ法では、インクプロット（図版）

の存在が、観察機能を果たしている。この観察機能をどの程度重要視するかによって、心理療法の各流派や治療者間にアプローチの相違が生じるように思われる。

## 6、おわりに—対話の諸相—

ロールシャッハ法と心理面接を照合しながら、対話のずれと対処法について述べてきた。対話は、verbal(vocal)な要素と non-verbal(atmosphere)な要素を含み、その根幹はむしろ後者にあるように思われる。コトバは虚構性と身体性を持つ。

ロールシャッハ法による対話の修練は、インクプロット（図版）を媒介として、主にverbal(vocal)な要素を多く含む対話の修練であることが多い。しかし、修練を積むに従い non-verbal(atmosphere)な要素をも捉えることができるようになる。だからロールシャッハ法は、対話の本質に迫ろうとする第一歩であると筆者は考えている。読者の皆様には、ロールシャッハ反応をなぞり味わうことをおすすめしたい。

注) 本論では「心理面接」と「心理療法」をほぼ同義として扱っているが、あえて区別するならば後者の方が、より大系化されたものであると言えるかもしれない。

## 文 献

- 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き  
花クリニック神田橋研究会  
織田尚生 1999 ユング派の方法論と神話 東洋英和女  
学院大学心理相談室紀要3, 28-31